

氏名(本籍)	伊藤雅広(東京都)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第121号
学位授与年月日	令和5年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	小学校体育授業のフラッグフットボールにおける作戦立案能力に関する研究 — 発散的思考と収束的思考に着目して —
審査員	主査 日本体育大学 教授 近藤智靖 副査 日本体育大学 教授 岡出美則 副査 日本体育大学 教授 伊藤雅充

《論文審査結果の要旨》

本研究は、小学校体育授業のフラッグフットボール単元を対象とし、創造性や発想法の研究分野で示されている発散的思考と収束的思考という思考法を踏まえ、2つの研究課題を設定している。1つ目は、作戦立案時の思考の働きに着目した評価方法の作成である。2つ目は、作成した評価方法を用いて4年生と6年生の作戦立案能力の実態を把握すること、並びに両学年の差異について検討をすることである。

本研究は、主に4つの章から構成されており、第1章では、発散的思考と収束的思考の観点から作戦立案テストの作成について論じている。論者は、本研究の中心概念となる発散的思考を「ある条件に対して多種多様なアイデアを考える際に働く思考」と定義し、作戦立案において「戦術的課題に対して多種多様な作戦を考える思考」としている。具体的なテストにおいては「作戦の立案数と具体性」という2つの点を発散的思考として評価している。また、一方の収束的思考を「ある条件に対してより適切なアイデアや正解を導き出す時に働く思考」と定義し、作戦立案において「戦術的課題に対して適切な作戦を考える思考」としている。具体的なテストにおいては「守備者のいない場所を攻撃している作戦」を収束的思考として評価している。

第2章では、4年生の授業単元前後の思考の実態を明らかにしている。発散的思考の観点では、作戦立案数が単元後に増加していることや、守備者及びおとりについて記述した作戦の割合が増加することを明らかにしている。また、収束的思考の観点では、作戦立案割合が単元後に高まり、より適切な作戦立案が可能になることを明らかにしている。

第3章では、第2章と同様に6年生の思考の実態を明らかにしている。発散的思考の観点では、作戦立案数が単元後に増加し、守備者及びおとりについて記述した作戦割合の増加を明らかにしている。収束的思考の観点では、作戦立案割合が単元前後で変化しないことを明らかにしている。

第4章では、第2章と第3章を踏まえて、4年生と6年生の差異を検討している。4年生の方がより多くの作戦を立案するものの、6年生は具体的な作戦立案が可能であることを明らかにしている。とりわけタイミングの記述は、6年生の記述割合が高い結果となっており、6年生と比して4年生は時間概念の理解の困難さを示しているとしている。他方で、守備者とおとりについては、4年生も6年生も同水準での記

述可能性を明らかにしている。さらに、6年生は「守備者のいない場所を攻撃する作戦」の立案が多いものの、授業単元を経ると4年生であっても6年生と同じような結果が得られることを明らかにしている。

第1～4章までの研究結果を踏まえ、本研究の結論の中で以下の示唆を提示している。

- 1 作成したテストは、発散的思考と収束的思考の観点から、技能差に関わらずに作戦立案能力の把握が可能であったこと。
- 2 発散的思考と収束的思考を重視した授業単元の構成によって、作戦立案能力の育成が期待できること。
- 3 発散的思考と収束的思考の実態を基にチーム作りを行うことで、より効果的に学習を進めることができる可能性があること。
- 4 発散的思考と収束的思考を踏まえて、さらには、発達段階を考慮した指導を行うことによって、作戦立案に関わる指導を系統的に進めることができる可能性があること。

以上が本研究の要旨である。

本研究は、小学校体育授業で実施されているフラッグボール単元を対象として、創造性や発想法の研究分野で示されている発散的思考と収束的思考に着目しながら、小学生の作戦立案能力を評価しており、体育科教育学に新たな知見を提示するものであるといえる。こうした新たな知見は、今後の小学校体育授業の実施に対して示唆に富むものとなっており、新たな指導方法を期待させる可能性をも有している。よって、本研究は高い評価を与えうるものとする。

最終試験では、審査員より「作戦と戦術の関係とその定義」「回答結果の解釈にあたり児童が自己の能力をどう認識しているか」「守備者・タイミング・おとりといった3観点から確認できることと、かえって確認できなくなること」等の質問・意見が出された。論者は、こうした一連の質問・意見に対して、自身の研究成果を踏まえて適切に回答をしていた。さらに、審査員より「6年生のデータと作戦立案テストとの関係についての解釈」「他教科や他種目の指導との関係」「思考の汎用性と固有性」等についても質問・意見がなされた。論者は、こうした一連の質問・意見に対しても、自身の研究で明確になった点や課題を踏まえつつ、適切に回答をしていた。

さらに審査の中では、今後、ゲーム条件や種目等の変更が一連の思考にどのような変化を与えるか、加えて、教授方法の影響が一連の思考にどのような影響を与えるものか等、さらなる研究の発展が期待されるとの意見もなされた。

以上、審査の結果、伊藤 雅広氏は博士(体育科学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

《最終試験結果》

合格 ・ 不合格

2023年1月13日